

な か ま

発行
佐倉市立中央公民館
編集
なかま編集委員会
〒285-0025
佐倉市鎚木町 198-3
電話 (043) 485-1801

カラチの思い出 ----- 山田 明 老後を楽しく生きよう ----- 廣吉 正毅
本棚の片隅から ----- 犬丸 俊博 ゴルフ雑感 ----- 長田 成兒

私は、釣り人小学2年生

田中 修司

私の故郷、静岡県清水は
広大な駿河湾を臨み、貿易港
の清水港と漁港の江尻岸壁が
あり、また「三保の松原」の
海岸や名勝「日本平」と横に
位置する徳川幕府縁の「久能
山東照宮」の麓の海岸など、
界限には絶好の釣り場が多い
ところである。

浜辺では「投げ釣り」でキ
スやイシモチを、また岸壁で
は「杓り釣り」でアジやカサ
ゴを狙ったものだ。また「モ
ジ」という手製の針金の丸い
輪っぱに網を張り、その上に
魚の腸を括り付け、ひと晩、
岸壁から海中に吊るして置く
と「ワタリガニ」がしがみつ
いているのである。
さて、釣りの極意は「一に
場所、二に餌、三に腕」と言
われ、道具や腕が良くても魚
がいない所で糸を垂らしても

時間の無駄であろう。
ところで、人類は4万2千
年程前からマグロやカツオ等
を釣っていたらしく、東太平
洋の国、東ティモールの遺跡
調査で貝で出来た1万数千年
前と思われる釣り針が発見さ
れたそう。何と驚くべきこ
とだ。

さて、釣り方で特に珍しい
のは昭和40年代に、姿を消し
た東京湾の風物詩「脚立釣り」
である。
これは、遠浅の海で脚立に
座り「キス」を狙う漁法で木
更津の漁師が編み出したが、
かつての脚立は金属製であつ
た為「風情がない」と、檜製
を特注し、復活させたそう。だ
是非、一度体験してみたい
ものだ。
ところで私「釣り人」は最
近、市原市の「オリジナルメ

「カー海づり公園」に通つて
いる。ここは、栈橋型の釣り
場でフェンスに囲まれ、また
監視員が安全確保の為に常駐
し、釣りの指導もしてくれる。
ここでは「サビキ釣り」でア
イナメやカレイ、サバなどが
期待出来、また竿の先には東
京湾が広がり、行き交う大型
船やアクア・ライン、三浦半
島、富士山を眺めながら波間
に揺れる「ウキ」を見つめな
がら、物思いに耽れば至福の
境地に嵌るひと時だ。
「釣り人小学2年生」は、
その内に南房の「和田浦」か
ら迷い込んで来る？「鯨」を
釣り揚げて、一挙に「大学院」
へのひとつ跳びを密かに狙つ
ているところである。

(編集委員)



カラチの思い出

皆さん、カラチと言う都市を御存知ですか。パキスタン南部、アラビア海に面した港町です。そこに駐在を命じられたのは、今から四十八年前の春でした。そこに至る迄がドラマティックで、最初ニューヨーク駐在の話があり、その後「ホノルル駐在の話もあるが」との話を、寒さ嫌いの小生、是非とも変更をお願い。しかし世の中甘くなく、人事異動で示されたのがカラチでした。正に天国と地獄、上司に抗議するも上司も後に役員になる程の人物、若輩の小生、手もなく説得され、泣く泣く赴任。着任して驚き、聞きしに勝る生活環境の悪さ、つくづく「日本は良い国だ」と思ったものです。

との事、二度と箸は出せませんでした。でもチャパティ（印度料理のナンと同様）に現地の種々なスパイスを使用したカレーを付けたのは美味でした。水質も悪く飲水は勿論、歯磨きにも沸かし冷ましを使用するも数日で下痢、先輩に「カラチの洗礼」と笑われたものです。市場には、羽足を縛られた鶏、水牛や羊の頭が地面に並べられ魚は豊富でしたが、蠅が飛び回る中で、衛生観念の無さに驚いたものです。魚と言えば、殿様の釣りも経験、港で餌となる小蝦えびを買ひ、船を借り出港、船には現地人の子供が同乗し餌の付け替え、釣った魚を取り外してくれるという全く手を汚さない釣りでした。その魚を餌に蟹を釣ったのも良い思い出です。その他、種々の珍しい体験をした三年間でした。

（鏑木町 山田 明）

老後を楽しむ 生きよう

年をとってからは出来るだけ不安や悩みを抱えず楽しく暮らしたいものだ。

私は、仕事を辞めた後、史跡めぐりを楽しみの一つにしている。それも遠くに行くのではなく日帰りできる範囲である。

先だって仲間と上野公園に行き、江戸時代の史跡を見学した。ここではガイドさんの素晴らしい説明でいろんなことを知り、満足のいくひと時であった。

このところ気になることがある。いわゆる報道によれば国民の四人に一人が六十五歳以上と言う。それなのに地域の老人クラブの会員が減っているそうだ。その理由はともかく年を重ねて家に引き籠ってばかりでは良くない。可能な限り外に出て日光にあたり新鮮な空気を吸って健康に近づけよう。

さて、老後を健やかに楽しく生きるにはどうすれば良いか。それは、いま何が自分のできるかを考えてみる。お年寄りには若者にはない豊かな知識と経験とがある。この知識や経験を地域に活かさない手はない。何かを思いついたら躊躇しない。一歩踏み出し行動すればその後はおのずと開けてくる。

例えば、学童登下校の交通整理や防犯パトロールに協力する方法もあると思う。これが大いに地域の手助けとなり、おまけに心身ともに活力を得て健康になる。

このように言うが、私は何様でもない。趣味とボランティアを通じて喜びを貰い生きている市井しせいの一老人にすぎない。

人生には限りがある。さらに夢と生きがいを見つけ充実した老後を楽しみたい。

（ユーカリが丘 廣吉 正毅）

本棚の片隅から

ある日、テレビを見ていると、何かしら背後から見つめられているような不思議な感覚が。振り返って見ると、古い本棚の中の全集。それぞれが白い箱に入った全12巻で、日焼けはあるものの小豆色の帯も付いた風格さえ漂う古書。その中で唯一記憶に残るのは初巻に収載された「朝、胸苦しい夢から目をさますと、…」で始まる有名な『変身』（カフカ著）の文章。通勤電車を降り家路に向かう途中の小さな書店。隔月毎に出会う新本の手触り、店頭に積まれた本の中から手に取った時の微かな喜びなどが甦る。

転勤の度に引越し荷物として共に旅をし、本棚に再び鎮座する全集。決して「読む時間」がなかった訳ではない。「飲む時間」を少なくすれば、「読む時間」は容易に確保出来たはずなのに。何十年も経

（大崎台 犬丸 俊博）

ゴルフ雑感

二十数年間、へぼゴルフを続けています。プレー費と道具代が少し嵩むのが難ですが、結構面白い。

ゴルフは、マナーのスポーツと言われています。何せ人を相手にせず、ゴルフ場の地形やお気を相手にするゲームです。あるがままの状態で打ちなさいというのがルールの基本で、審判はおらず、トラブル時の処理は自己判断、スコアも自己申告という、大人!?のスポーツなのです。

しかし、怖いもので、ゴルフをしていると、その人の性格がでてしまいます。打ちやすいところにボールを動かしてから打つことが習慣になっている人。他人のプレーにいちいち批評を加えたり、教えたがる人。打とうと構えているプレーヤーの真横で観察している人。クラブを一本ごとにカートに取りに行く人。そ

ういう人を見てイライラする人などなど。一度トラブルに見舞われると、それを取り返そうと無理をしてさらにミスを重ね、冷静さを失い、ひいてはキャディーさんや他のプレーヤーや天気のせいにしてしまうこともあります。会心のドライバーショットが打たのに、二打目はディボット跡にしっかりとハマっていたとか、OBゾーンめがけて飛んでいったボールが木に当たってフェアウェイに出てきたとか、運にも左右されます。一旦気が抜けてしまうと、ガタガタになってしまふのですが、失敗や不運を飄々として耐えることのできる人もいます。

（大崎台 長田 成兒）

7月の黒板

『なかま』の原稿を募集しています！

『なかま』の2ページと3ページは佐倉市民の皆さんから投稿いただいた記事を掲載しております。

『なかま』の原稿は、自由テーマを原則としています。「出会いと別れ」、「旅の思い出」、「祭り」、「私のふるさと」、「私の健康法」など何でも構いません。また、日常での出来事で発見したこと、気付いたこと、経験や感想などもご随意にお書きください。

原稿の字数は、650字（13字×50行）以内です。また、掲載するにあたり常用漢字への変更や、句読点等修正させていただくことがあります。

問い合わせ先

佐倉市立中央公民館 TEL: 043-485-1801 FAX: 043-485-1803

〒285-0025 佐倉市鐺木町 198-3

E-mail: chuo-public@city.sakura.lg.jp

URL: http://www.city.sakura.lg.jp/soshiki/16-1-0-0-0_1.html

『なかま』は佐倉市民カレッジの学生と卒業生で構成される編集委員が編集し、市民カレッジ情報コースの卒業生が文字入力を行っています。

さくら道

趣味が生きがいだという人。家族が生きがいだという人。仕事やボランティアが生きがいだという人。いろんな生きがいがあるが、自分の生きがいは一体何だろうと、この一年模索してきた。

りの楽しさ、充実感で日々暮らしてきた。ある時、はっとした。この胸の高鳴り、ワクワク感は何だろう。まるで遠足の前の日の子どものように、一週間に一度のカレッジを楽しみにしている自分に気がついた。もしかしてこれが生きがいかも。今、カレッジのなかまがいること、そのなかまの一員であることが嬉しい。この絆をずっと大切にしていきたい。

(林 千恵子)

あとがき

少し早いです。暑中お見舞い申し上げます。

今月号も素晴らしい随筆が揃いました。

『私は釣り人…』の末文「鯨を釣り上げて一挙に大学院へ…」と、何と豪快な表現！感動しました。

『カラチの…』で、「ニューヨーク…ホノルル…異動…カラチ、まさに天国と地獄…」この貴重？な体験談に思わず

吹き出しました（失礼！）。

『老後を…』では、「何かを思いついたら躊躇しない。一歩踏み出し行動…」と説いています。

『本棚の…』は、「振り返ってみると古い本棚の中の全集…」とのこと。あるある我が家にも。『ゴルフ…』では、「マナーのスポーツ…人生の縮図を見ているようでもある」と語っています。同感同感。

どうぞ次号もお楽しみに。

(鵜澤 和良)